

# 独立監査人の監査報告書

平成28年7月15日

東京電力パワーグリッド株式会社

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 白羽 龍三 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 湯川 喜雄 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 春日 淳志 印

当監査法人は、電気事業託送供給等収支計算規則（平成18年経済産業省令第2号）（以下「託送収支計算規則」という。）第3条の規定に基づき、東京電力ホールディングス株式会社（旧会社名 東京電力株式会社）の第92期事業年度（平成27年4月1日から平成28年3月31日まで）の送配電部門収支計算書等、すなわち、送配電部門収支計算書、社内取引明細表、固定資産明細表、共用固定資産帰属明細表、設備別費用明細表、部門共通費用帰属明細表、超過利潤計算書、超過利潤累積額管理表、特定設備投資額明細表、内部留保相当額管理表、乖離率計算書及びそれらの注記について監査を行った。

## 送配電部門収支計算書等に対する経営者の責任

経営者の責任は、託送収支計算規則第2条第1項及び第2項に準拠して送配電部門収支計算書等を作成することにある。また、送配電部門収支計算書等の作成に当たり適用される財務報告の枠組みが状況に照らして受入可能なものであるかどうかについて判断することにある。経営者の責任には、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない送配電部門収支計算書等を作成するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

## 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から送配電部門収支計算書等に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に送配電部門収支計算書等に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、送配電部門収支計算書等の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による送配電部門収支計算書等の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、送配電部門収支計算書等の作成に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め送配電部門収支計算書等の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

## 監査意見

当監査法人は、上記の送配電部門収支計算書等が、すべての重要な点において、託送収支計算規則第2条第1項及び第2項に準拠して作成されているものと認める。

## 送配電部門収支計算書等の作成の基礎

注記に記載されているとおり、送配電部門収支計算書等は、東京電力パワーグリッド株式会社が託送収支計算規則第4条の定めにより公表するために、託送収支計算規則第2条第1項及び第2項に準拠して作成されており、したがって、それ以外の目的には適合しないことがある。当該事項は、当監査法人の意見に影響を及ぼすものではない。

その他の事項

東京電力ホールディングス株式会社(旧会社名 東京電力株式会社)は、上記の送配電部門  
収支計算書等のほかに、平成28年3月31日をもって終了する事業年度について、会社法及び  
金融商品取引法の規定に基づき我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に  
準拠した計算書類及びその附属明細書並びに財務諸表をそれぞれ作成しており、当監査法人は、  
これらに対して平成28年5月17日(会社法監査)及び平成28年6月28日(金融商品  
取引法監査)に別途、監査報告書を発行している。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害  
関係はない。

以 上

---

(注) 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものである。